



英語能力や言語適性と英語冠詞使用との関係について

田中, 順子

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 32:15*-32*

(Issue Date)

2009-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001672>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001672>



英語能力や言語適性と英語冠詞使用との 関係について

田 中 順 子

はじめに

英語において冠詞 *the* は最頻出語であり、冠詞 *a* は4番目に高頻度で現れる語である (Leech, Rayson, & Willson, 2001)。このように英語冠詞は頻出項目なのであるが、英語を第二言語 (L2) あるいは外国語 (FL) として学ぶ者にとって、英語冠詞は習得が非常に困難な項目である。その困難さは学習到達度が低い者だけに限られるのではなく、上級学習者にとっても問題であると言われている (Celce-Murcia & Larsen-Freeman, 1983; Young, 1986)。我々 (田中, 2006; 福田・田中, 2009) は、冠詞が存在しない ([-ART]) 言語である日本語を L1 とする学習者が英語を産出する際に、どのような言語環境下において英語冠詞の使用が困難であるのかを探索した。本研究では以下の二点について英語冠詞習得研究を行う。一点目は、英語冠詞習得の困難さと学習者の英語能力との関係を検討することである。二点目は、学習者の言語適性といった個人差との関連性を探索することである。その際に、トークン (token、述べ語数) を分析単位として使用した先行研究とは異なり、タイプ (type、異なり語数) を分析単位として分析を行う。

冠詞習得の難しさ

冠詞習得の困難さの原因についてはいくつか原因があると思われる。第一に、冠詞やその冠詞を包含する上位範疇である形態素 (Dryer, 2009a, 2009b) は、知覚的サリアンス (perceptual salience) が低いために、学習者が気づきに

くいということが挙げられる。コミュニケーションの際には、状況から得られる情報をもってすれば、冠詞を処理しなくても、コミュニケーションの相手が意図した意味を理解することができる。そのため、冠詞を処理しないままでメッセージをやりとりすることが可能になる。理解処理の際に冠詞にほとんど注意が払われていないならば、理解処理よりもさらに認知負荷が高い言語産出の際に、L2学習者が冠詞を正しく産出することは困難である (cf. Swain, 1985)。このようにインプット中の冠詞に注意が向けられていないことが、冠詞が正しく産出できないことにつながると考えられる。上級学習者でも冠詞の学習が不十分なままであることは珍しくなく、冠詞の習得度合いが L2 習得の程度を示す指標であるとも言われている。

L1に冠詞が存在しない学習者によるL2英語習得の先行研究

L1 習得では誰もが例外なく英語冠詞を習得できるのであるが、その習得過程はどのようになっているのであろうか。L1 英語習得においては、定冠詞 *the* が不定冠詞 *a/an* よりも先に習得される (Maratos, 1976)。不定冠詞 *a/an* が出現すべき環境にも *the* が使用され、定冠詞 *the* が過剰使用されるという、L2 習得と共通した特徴も見られる。インプットやアウトプットの質と量が豊富な L1 習得であっても、*the* と *a/an* の区別の学習には時間がかかり、ゆっくりと学習される (MacWhinney & Bates, 1978 as cited in Chaudron & Parker, 1990)。この L1 習得での英語冠詞習得と L2 習得における英語冠詞習得にはその他にも共通点がある。それは、無標の項目が有標の項目よりも先に学習される点や、発達が誤用論的構造 (あるいは前統語的構造) から始まって次第に統語的な発達を遂げる点である (Chaudron & Parker, 1990, p.50)。

L1に冠詞が存在しない学習者による L2 英語習得の先行研究例は少なくない。以下で、被験者に L1 日本語話者を含む L2 英語冠詞習得の先行研究をレビューする。これらは学習者の英語習得レベル、学習プロセス、冠詞が現れる言語形態コンテキスト、談話コンテキストといった要因によって学習者の冠詞使用がどのように異なるのかを探索した研究である。

Yamada & Matsuura (1982) は、日本人英語学習者を中級 ($N=35$) と上級 ($N=35$) の二つの能力レベルに分けて、三種の英語冠詞 *a/an*, *the*, ϕ の習得について実験研究を行った。両群はクローズテスト (75問) を一週間の間隔をあけて2回受験した。平均正答率は75%であった。冠詞のタイプ別の困難度は、最も容易であったものから最も難しいものの順で、中級群では *the*, *a/an*, ϕ であり、上級群では *the*, ϕ , *a/an* の順であった。両群ともに見られた方略は、*the* が必要ではない状況、つまり *a/an* あるいは ϕ が来るべき箇所 *the* を過剰使用する (*the* for *a/an* or ϕ error) というものであった (p.59)。その一方で、*the* が必要である状況で *a/an* や ϕ を使用すること (*a/an* for *the* error or ϕ for *the* error) はまれであった。¹ この *the* の過剰使用は、他の多くの研究者によっても観察されている (Huebner, 1983; Master, 1997; Parrish, 1987; Thomas, 1989などを参照)。

Thomas (1989) は、成人 L2英語学習者 ($N=30$, L1が [-ART] の者は25名で、そのうち L1日本語話者が最も多く13名) に絵を見せて L2で描写させ、その談話中の冠詞使用を観察した。その結果、英語能力が上がるにつれて *the* や *a/an* の正用が増えてくると、どの能力レベルにおいても *the* の方が *a/an* よりも正用が多いことを示した。特筆すべきは、本来 *a/an* や ϕ を使用すべき非指示的不定 (nonreferential indefinite) 環境 ([-SR] [-HK]) と指示的不定 (referential indefinite) 環境 ([+SR], [-HK]) とを比較したところ、指示的 (referential) 環境の方が *the* の出現が多かったことから、[-ART] L1を持つ学習者は、*the* を指示性 (referentiality) と結びつけるという誤ったストラテジーを使っていることが示唆された点である。²

Chaudron & Parker (1990) は、談話的な有標性 (有標な順に current, known, new reference) や形態的な有標性 (ゼロ照応は有標性が低く、左方転位や存在文中の名詞句は有標性が高い) が、L2英語学習者の名詞句の使用に及ぼす影響を検討した。成人日本人英語学習者 ($N=40$) に自由発話をさせたり、4コマ漫画を見せて発話を誘発した。結果として、学習者は談話コンテキストを識別しており、より無標の談話コンテストにおいて名詞句がより正し

く使用できることや、無標な形態下においては有標な形態下よりも先に名詞句の正確な使用が出現することが明らかになった。冠詞の使用については、本来は *current* や *known* コンテキストで使用されるべき *the* を、*new context* において使用するという誤り、つまり *the* の過剰一般化が認められた。また、最も能力が高い学習者に *a/an* の誤用が見られた。³

Yoon (1993) は、英語名詞が可算か不可算かの判断を、在米の成人 L1 日本語話者 ($N=27$) と成人の L1 英語話者 ($N=31$) に行わせた。タスクは二つあり、第一タスクは英語エッセーから抜き出した名詞 87 語について、コンテキストなしに可算か不可算かを判断させるものである。第二タスクは、英語エッセーの冠詞を補うクローズテストであった。名詞の可算性をコンテキスト情報なしに判断させる方法論に問題があることは否めないものの、L2 英語学習者と L1 英語話者との間の判断結果に乖離があることが示された。

Master (1995) は、在米の L2 上級英語学習者 ($N=19$ 、うち L1 日本語話者 4 名) に、3—4 週間内に 4 回作文を書かせて彼らの冠詞使用を検討した。その作文に指導者がフィードバックを与え、学習者が自分のエラーを記録した。最も多いエラーは、*the* が必要な状況で ϕ を使用するもの (ϕ for *the* error) であった。エラーの全体数は学習が進むにつれて減少したが、上記エラー (ϕ for *the* error) が占める割合は上昇したという。

Jarvis (2002) は日本語と同じウラル・アルタイ語族に属するフィンランド語を L1 とする英語学習者 ($N=199$) と、ゲルマン語族であるスウェーデン語を L1 とする英語学習者 ($N=145$) の英語冠詞使用を比較検討した。被験者は grade 5 から grade 9 のフィンランド在住者であった。参加者は無声映画の一部を見てその内容を描写するタスクを行った。名詞句の出現状況を、話題連続性の観点から、新規、連続、再導入に分類し、談話構造の関係からトピックとコメントに分類して、冠詞の出現状況と正用・誤用の関連を検討した。また、L1 と L2 間の言語的距離の影響も検討した。結果として、L2 ではトピックとコメントの識別の感受性が高くないことや、L2 名詞句の新規、連続、再導入の区別をどのように行うかに L1 の影響が認められた。

Butler (2002) は、日本人大学生 ($N=80$) と L1英語話者 ($N=20$) を被験者として、英語冠詞使用の様相と、冠詞選択に関わる学習者の理由について検討した。L1日本語話者のうち60人は日本在住者で、20人ずつが能力別の3群に分けられた。残りの20人は在米の日本人で TOEFL-PBT で550以上のスコア保持者であった。参加者はクローズテストを受けて、空欄に *the*, *a/an*, ϕ を補った。クローズテスト終了後すぐに参加者に日本語で約30分のインタビューを行い、冠詞を選択した理由を尋ねた。Huebner (1983, 1985) にならい、特定性の有無 ([+SR] か [-SR] か)、聞き手との情報の共有の有無 ([+HK] か [-HK] か) に基づいて、冠詞の出現環境を分類した。分析の結果、聞き手と情報が共有されているかどうかを判断することが出来ないことや、名詞の可算性の判断が正しくできるかどうか冠詞の正用と誤用に関わっていると示唆された。上級学習者になるほど特定性 [±SR] の判断の誤りが減少する一方で、聞き手との情報共有の有無 [±HK] の判断の誤りは上級学習者を含む全ての群に認められた (Butler, 2002, pp.462-463)。

冠詞学習が不十分になる要因

冠詞習得が不十分なままである原因は何であろうか。それについては、L2習得における形態素習得の先行研究が参考になる。L2形態素の習得程度は学習者の個人特性（個人差）に起因することが示唆されている。この個人差の例として、L2が話されている環境に入った年齢 (age of arrival) や言語適性 (language aptitude) が挙げられている。L1がウラルアルタイ語族であるハンガリー語の学習者によるアメリカでの L2英語習得の研究によると、思春期以前に L2習得環境に来て L2習得を始めた場合は、全ての学習者が L2形態素の習得が可能であった。しかし、思春期以降に L2環境に来て L2習得を始めた場合には誰でもが L2形態素習得ができるわけではなく、言語適性が高い学習者のみが L2形態素の習得が可能であったという (DeKeyser, 2000)。この言語適性には4つの下位範疇が概念化されている (Carroll, 1965 in Skehan, 1989)。その第一は、音と記号を関係づける能力、第二に、語の文法機能を認

識する能力、第三はデータから規則を帰納する能力、第四が記憶能力である。⁴ DeKyeser (2000) の研究結果から、思春期以降にL2学習を始めた者の形態素の習得、引いては冠詞の習得には、このような生得的な言語適性が関わっていると考えられる。

先行研究のまとめ

先行研究のレビューから、学習者の英語能力に関しては次のようなことが言える。上級学習者とそれ以外の学習者を比較すると、上級者では[±SR]の誤用が減るが、[±HK]の誤りは上級を含むすべての学習者に見られる。冠詞習得の難易度は、上級者にとっては *the* > ϕ > *a/an* であり、*a/an* が最も難しい。上級よりも能力が低い者にとっては、*the* > *a/an* > ϕ の順であり、 ϕ が最も難しい。また、多くの研究で、*the* 以外を適用すべき場面で *the* を適用する、いわゆる *the* の過剰使用が報告されている。逆に、本来 *the* の適用場面で、*a/an* や ϕ を代用することは少ない。しかしこれとは逆に、*the* が過少使用される傾向があり、この *the* の過少使用が上級者になっても排除しにくいエラーであるとの指摘もある (cf. Master, 1995)。L2学習者にとって困難な冠詞習得が、一部の限られた人では可能である理由として、思春期以降の学習者による L2形態素の習得には、高い言語適性が関係していることが示唆された。

本研究

日本の英語学習者の多くは日本語を母語とし、外国語環境下で英語を学習している。彼らは冠詞が存在しない[−ART]のL1を持ち、思春期開始以前にL2環境に入って習得を開始するという「理想的な」学習環境にはいない。先行研究の結果から、このような学習者が英語冠詞を学習する際には数々の困難点があると推測される。本研究では、外国語学習環境下での英語冠詞習得に現れる学習上の困難点を探り、それらの問題と学習者の個人差がどのような関係性を持つのかを探索する。具体的には以下の2つの研究仮説を立てて検討するものである。

1. 英語能力が高いとより正しい冠詞使用ができる。
2. 言語適性が高いとより正しい冠詞使用ができる。

研究方法

参加者

本研究の参加者は、当初43人の日本に在住する大学生（年齢19—22歳）で、最終的に42人となった。彼らは福田・田中（2009）研究と同じ参加者である。参加者はクジにより二群に分けられた。一つ目の群は、最初にスピーキングで英語産出を行い、次にライティングで英語産出を行う群（SW 群、 $N=21$ ）である。もう一方の群は、ライティングを行い、次にスピーキングで英語産出を行う群（WS 群、 $N=21$ ）である。これらの二つの群間に、英語能力（TOEFL—PBT 換算値）、年齢、英語学習歴において統計的に有意な差は見られなかった。なお、スピーキングやライティングといった異なる様相のタスクの実施順序の違いは冠詞産出に影響を与えていないことがわかっている（福田・田中, 2009）。

実験装置と手続き

データ収集の手続きは、田中（2006）に従って行われた。⁵ 本研究では“Pear Film”という5分間の無声動画⁶を刺戟として使用し、参加者はこの動画をPC上で2回続けて視聴した。視聴後、参加者はまだ動画を見たことがない人を相手に物語の内容を説明するように指示された。SW 群は口頭で動画の内容を伝えるように指示され（スピーキングタスク）、WS 群は書いて伝えるように指示され（ライティングタスク）、参加者は指示された様相でナラティブ（物語、談話）を行った。これが第一のタスクである。

参加者は引き続き第二のタスクを行った。第一タスクで見たのと同じ動画を再度視聴し、一回目の様相とは異なる様相で、動画を見たことがない人に内容を伝えるように指示された。スピーキングでの産出（スピーキングタスク）はAudacity Portable（2007）を使用してPCに、あるいはICレコーダにデジ

タル録音された。ライティングでの産出（ライティングタスク）は、参加者が紙とペンで作文をして校正し、その後で PC に入力した。

スピーキングとライティング、あるいはその逆順でのナラティブを終了後、参加者は二種類の質問紙に回答した。一つは、産出タスク実施中の学習者の気付きを調査する事後アンケートであり、もう一つは参加者の英語学習歴や海外経験を尋ねる背景アンケートである。実験は個人単位あるいは少人数のグループ単位で行われた。所要時間はスピーキングタスクに 3—9 分、ライティングタスクに 25—50 分であり、すべての実験手続きを修了するのに約 90 分を要した。

言語能力は、参加者が報告した言語能力試験のスコアを TOEFL-PBT スコアに換算した。言語適性は Modern Language Aptitude Test (Carroll & Sapon, 1959)（以後、MLAT と呼称）を使用して計測した。MLAT は上記のデータ収集とは別の機会に実施された。

データ分析

名詞句の分類

データ分析の方法は次のとおりであった。スピーキングで産出されたデータは、書き起こし作業の後に、ライティングで産出したデータ共々 T-unit (Hunt, 1973) に分類した。次に、データ中の全ての名詞句を同定して抽出した。本研究では、全ての名詞句のトークン（token、述べ語数）ではなく、タイプ（type、異なり語数）をもとに集計した。トークンを数えると、特定の名詞が繰り返された場合、その名詞とともに起こる冠詞使用の生起数を増幅させることになる。このような特定の名詞の繰り返しに伴って、共起する冠詞の見かけの生起数を増幅させることがないようにするために、タイプ数を使用して分析した。⁷

冠詞分類方法

Huebner (1983) にならい名詞句が冠詞とともに現れる状況を 4 つに分類した。⁸ この 4 分類は、「特定の対象への指示性」(specific reference) と、「聞

き手にとって既知情報かどうか」(hearer's knowledge) という二つの指標の有る無しの組み合わせから得られたものである。この4種類の状況は、その状況下で生起する冠詞の種類によってさらに細分化され、最終的に以下のような8つのカテゴリーが作られた。これらの8つのカテゴリーを本稿では8つの冠詞タイプと呼ぶこととする。表1に8つの冠詞タイプの特徴と用例をまとめた。

全ての名詞句は上記の8つの冠詞タイプか、今回は研究対象としない9つの名詞分類に分けられた。⁹ 冠詞を同定した後で、全ての冠詞使用について正用か誤用かを判別した。この判別は英語を第二言語とする複数の研究者が行い、不明例についてはL1英語話者の判断を仰いだ。8つの冠詞タイプの生起頻度をスピーキングとライティングの両方について計測した。

統計分析

統計分析はSPSS 13.0Eを使用して行われた。データが連続変数ではなく、正規分布ではないため、主としてノンパラメトリック検定を使用した。また、データの頻度数が5以下の場合がしばしばあったことから正確検定を行うこととした。仮説1の検定にはマン・ホイットニーのU検定を使用した。仮説2

表1 8つの冠詞タイプ

	冠詞タイプ	指示性	既知情報	冠詞	用 例
1	[-SR][+HK]	— — —	+ + +	φ a/an the	Language is a great invention of humankind. A cat likes mice. The whale is a mammal.
2	[+SR][+HK]	+	+	the	Pass me the pen.
3	[+SR][-HK]	+ +	— —	a/an φ	I saw a strange man standing at the gate. I keep sending φ messages to him.
4	[-SR][-HK]	— —	— —	φ a/an	φ Foreigners would come up with a better solution for this matter. I'm going to buy a new bicycle. He used to be a lawyer.
	計 8タイプ				

注：Butler (2002, pp.478-479) の分類と用例に著者が一部変更を加えた。

の検定にはピアソンの積率相関係数を算出した。特記のない限り危険率は.05に設定した。

他の研究との関連性

前述したように、本研究では無声動画を見てその内容を第三者に話す、あるいは書くというタスク（ナラティブタスク）を採用した。これは Jarvis (2002) にならったものである。一般に、L2冠詞習得研究ではクローズテストが用いられることが少なくない (cf. Yamada & Matsuura, 1982; Akamatsu & T. Tanaka, 2008など)。しかし、クローズテストでは本来冠詞使用の際に判断材料となる談話情報が存在しないため、自然な言語産出中の冠詞産出とは異なる言語処理を経て冠詞の選択を行うことになる可能性がある。しかし、それでは学習者の本来の冠詞選択行動とは異なる行動の結果を観察することになるため、動画を使用したナラティブタスクを採用した。

先に述べたように、ナラティブの産出データには、単語の繰り返しにより、特定の冠詞の出現頻度が増進することがある。その問題を回避するために、福田・田中 (2009) とは異なり、データ分析の際にトークンではなくタイプを計測することにした。また、先行研究 (田中, 2006; 福田・田中, 2009) ではライティングとスピーキングの両方の様相のデータを分析対象としたが、本研究では、学習者の持つ能力 (competence) が表出されやすいライティングのデータのみを対象として仮説 1 と仮説 2 を検討することにした。¹⁰

結 果

記述統計の結果

まず8つの冠詞タイプ別の冠詞使用の正用と誤用をタイプ数をもとに算出し、ナラティブ産出の様相（スピーキングかライティング）別に集計した。さらに8つの冠詞タイプを正用率と誤用率に分けて検討したところ、誤用率が15%を超す冠詞タイプが4つあった。それらは、[-SR][+HK] ϕ (15.58%)、[-SR][+HK] *the* (25.97%)、[+SR][+HK] *the* (16.27%)、そして [-SR][-HK]

φ (16.67%)であった。日本語を L1とする英語学習者にとっては、これらは習得上困難なものであることが示唆された。¹¹

出現頻度を見ると、[－SR][－HK] φ のように、正用と誤用を含めても出現頻度が12例と非常に少ない冠詞タイプの存在が認められた。また、正用と誤用を分けると、[－SR][＋HK] *a/an* の誤用（4例）、[－SR][－HK] φ の誤用（2例）のように出現頻度が5以下のものもあった。また、参加者一人あたりの冠詞出現頻度を見ると、一人当たりの平均出現数が1よりも小さいものが、全16指標（8つの冠詞タイプの正用と誤用）の半数である8つの指標において見られた。該当する冠詞のタイプと、指標ごとの平均出現数を表2に示す。

表2に示したように、上記の8つの冠詞タイプについては出現数が低い傾向にあると認められた。その理由については、もともと生起しない傾向にあるのか、参加者が使用を避けたためなのかは不明である。

仮説検証の結果

研究仮説1：英語能力と冠詞の正用との関係について

冠詞の使用と英語能力との関係を検討するために、参加者の英語能力を Common European Framework (CEF) に基づいて高能力群と低能力群に分類した。高能力群は TOEFL－PBT 換算で567以上の者 ($N=8$, $M=597.91$, $SD=19.61$) で、CEF では B2以上の能力レベルに相当する。低能力群は

表2 参加者一人当たりの出現頻度が1よりも小さい冠詞タイプ

	冠詞タイプ	正用・誤用の別	平均出現数	備考
1	[－SR][＋HK] φ	誤用	0.29	正用 1.55
	[－SR][＋HK] <i>a/an</i>	正用	0.81	
	[－SR][＋HK] <i>a/an</i>	誤用	0.10	
	[－SR][＋HK] <i>the</i>	誤用	0.48	
3	[＋SR][－HK] <i>a/an</i>	誤用	0.38	正用 4.50
4	[－SR][－HK] φ	正用	0.24	正用 1.80
	[－SR][－HK] φ	誤用	0.05	
	[－SR][－HK] <i>a/an</i>	誤用	0.05	

注：左欄の数字は表1の左欄のカテゴリー番号と一致する。

TOEFL-PBT 換算で567より低い点数の者 ($N=34$, $M=515.01$, $SD=31.70$) であり、CEF の A1–B1レベルに相当する。この二群の英語能力は有意に異なっていた ($Z=-4.36$, $p<.001$)。

先述したように、参加者各人が冠詞 8 タイプのすべてについて正用と誤用を産出しているわけではないため、欠損値が多く見られた。冠詞 8 タイプのうち、その正用と誤用において欠損値がない冠詞タイプを選択することにし、次の 3 つの指標を選択した。

- [+SR][+HK] *the*
- [+SR][−HK] ϕ
- [+SR][−HK] *a/an*

この 3 タイプの正用について高能力群と低能力群を比較した。群の人数が異なるため、正用は出現頻度ではなく正用率をもとにマン・ホイットニーの U 検定を行った。表 3 に上記三つの冠詞タイプの能力群別正用率を示す。

分析の結果、どの冠詞タイプにおいても高能力群と低能力群間に有意な差は認められなかった。ただし、一つの冠詞タイプ ([+SR][+HK] *the*) において高能力群と低能力群間に有意に近い結果が得られた ($U=80.00$, $p=.067$ (両側))。その他の二つの冠詞タイプについては、有意な結果は認められなかった。それぞれの結果は、[+SR][−HK] *a/an* ($U=120.00$, $p=.572$ (両側))、[+SR][−HK] ϕ ($U=110.00$, $p=.382$ (両側)) であった。結論として、仮説 1 は支持されなかった。

表 3 3つの冠詞タイプにおける能力群別正用率

	正用率 (%) (標準偏差)		
	[+SR][+HK] <i>the</i>	[+SR][−HK] ϕ	[+SR][−HK] <i>a/an</i>
高能力群 ($N=8$)	93.02 (.12)	100.00 (.00)	93.08 (.11)
低能力群 ($N=34$)	80.67 (.20)	95.09 (.15)	87.28 (.15)
全 体 ($N=42$)	83.02 (.19)	96.03 (.13)	88.38 (.14)

研究仮説 2：言語適性と冠詞の正用の関係について

言語適性と冠詞の正用との関係を検討する為に、仮説 1 の検討で使用した 3 タイプ（ $[+SR][+HK]$ *the*、 $[+SR][-HK]$ *a/an*、 $[+SR][-HK]$ ϕ ）の正用率を使用した。この正用率と、MLAT の part 1 から part 5 の各パート別の得点、MLAT の総得点との間のピアソンの積率相関係数を求めた。各パートの内容と、パート別の平均点と標準偏差は以下の通りである。なお、MLAT の受験者は26名のみであったため、研究仮説 2 はこの26名のデータをもとに分析した。

MLAT	総得点	($N=26$, $M=120$, $SD=12.14$)
Part 1	Number Learning	($N=26$, $M=36.08$, $SD=7.74$)
Part 2	Phonetic Script	($N=26$, $M=27.31$, $SD=1.54$)
Part 3	Spelling Clues	($N=26$, $M=54.23$, $SD=16.29$)
Part 4	Words in Sentences	($N=26$, $M=31.77$, $SD=4.75$)
Part 5	Paired Associates	($N=26$, $M=18.31$, $SD=5.03$)

表 4 に 3 タイプの冠詞正用率と言語適性得点間のピアソンの積率相関係数を示した。そのうち、 $[+SR][-HK]$ ϕ の正用率と MLAT の Part 2 の Phonetic Script 得点間に、有意な相関が認められた ($r=.503$, $p<.01$)。MLAT の Part 2 は先に挙げたように、音と記号を結びつける能力を測る部分である。この部分の得点と、 $[+SR][-HK]$ ϕ の正用率との間に有意な関連が認められたことから、仮説 2 は一部支持されたと言える。

表 4 3 タイプの冠詞正用率と言語適性得点間のピアソンの積率相関係数 (r)

冠詞タイプ	MLAT 総得点	Part 1	Part 2	Part 3	Part 4	Part 5
$[+SR][+HK]$ <i>the</i>	.057	.145	.173	-.147	.318	-.179
$[+SR][-HK]$ ϕ	.087	.193	.503*	-.091	-.020	-.153
$[+SR][-HK]$ <i>a/an</i>	.351	.189	-.125	.061	.280	.285

注： $N=26$. * $p<.01$

考 察

二つの仮説のうち、仮説 1 は支持されなかったが、仮説 2 は部分的に支持された。仮説 1 は、「英語能力が高いとより正しい冠詞使用ができる」というものであった。検討した 3 タイプの冠詞すべてについて、高能力群と低能力群間に有意な差は認められなかった。これは、データに欠損値がない冠詞タイプを選択した為に、参加者にとって比較的容易なタイプのみを検討の対象とすることになり、天井効果が現れたものと考えられる。ただし、[+SR][+HK] *the* の正用率においてのみ、高能力群と低能力群間に有意ではないが、有意に近い差が認められた。容易だと考えられる [+SR][+HK] *the* ではあるが、先行研究にも見られたように、中級学習者（本研究の低能力群）よりも上級学習者（本研究の高能力群）の方が、習得の度合いが高かったと言えよう。¹²

仮説 2 は、「言語適性が高いとより正しい冠詞使用ができる」というものであった。[+SR][+HK] *the* と、[+SR][−HK] ϕ 、[+SR][−HK] *a/an* の 3 つの冠詞タイプのうち、[+SR][−HK] ϕ と MLAT の Part 2 得点間においてのみ有意な相関が認められた。これは興味深い結果である。MLAT Part 2 は音と記号を結びつける能力を測る分野である。一方、[+SR][−HK] ϕ は、初出を表す用法であり、その正用率は 96.03% と高い（表 3 参照）。同じ [+SR][−HK] 環境下で現れうる他の冠詞は *a/an* であるが正用率は 88.38% とこれも比較的高い（表 3 参照）。冠詞は弱化されるため、聞いて理解する際のサリアンスが低いことと、産出する際には、後に続く名詞の可算性を判断する必要があり、語末に付いて数を標識する形態素にも注意を向けていなければ正しく産出できない言語項目であることと関係があると思われる。そのため、MLAT Part 2 という音と記号を結びつける能力との間に、有意な相関が現れたのだと考えられる。これはまた、L2 音声習得と密接な関係がある思春期以前に L2 環境下にいなければ、高いレベルの形態素習得がなされないという DeKeyser (2000) の観察とも合致する。

結 論

本研究は、自然な談話環境下で日本人 L2英語学習者に英語冠詞 *a/an*、*the*、 ϕ を産出させ、その冠詞使用の適切性と学習者の英語能力や言語適性との関係を量的に分析したものである。自然な談話状況を模した状況下で産出したナラティブデータを使用し、(1)学習者の英語能力の高低と冠詞使用の適切性の関係、(2)言語適性と冠詞使用の適切性の関係の二点を量的に検討した。分析の結果、二つの仮説のうち、仮説 1 の英語能力の高低と冠詞使用の適切性は支持されなかった。仮説 2 については、MLAT Part 2 の音と記号間の規則性を見つける能力と、冠詞が出現しない状況 (ϕ) での正用率との間に中程度の相関が認められた。これは、幼少時でなければ L2音声面の習得に成功しにくいということや、思春期以前に L2英語環境下で習得を開始しなければ形態素の習得が不十分になるという「習得に向いた時期」についての先行研究の知見と合致した。

本研究では、いくつか興味深い観察が得られたものの、今後の問題点として改善すべき点がいくつか挙げられる。まず第一に、冠詞に続く名詞の可算性・不可算性を本研究では扱っていないことである。同じ意味状況下においても後に続く名詞の可算性・不可算性の判断によって、冠詞を使い分ける必要がある場合が多い。今回刺戟として与えた動画では、可算名詞と不可算名詞を対比させて使う状況が生まれなかった。二点目は、繰り返しの特徴を回避するためにタイプ数を元に計測する方法の是非についてである。タイプ数を元に計測することで、繰り返しによる特定単語の出現頻度の増幅をさけることはできたが、元々生起することが少ない冠詞の用法については、さらに頻度が少なくなってしまう、データ中に 0 が多く現れることになった。このために検定に投入できる冠詞タイプが減少することにつながった。いろいろな冠詞タイプの習得状況を検討するためには、談話状況を判断させた上で回答をするような「クローズドエンド」のテストを補足的に採用し、可算・不可算の対比をテストする状況を作る必要があろう。三点目は、MLAT 得点との関係性を探索する際の参加者数が 26 名と少なかったことである。言語適性に関する研究を今後行う場合は、

被験者数を増やして行う必要がある。このようなマイナス点を補って L2 英語学習者の冠詞学習について引き続き検討することが必要であろう。

謝 辞

本研究は科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号17520377) の助成を受けたものである。

注

- 1 Master (1995) の研究結果では ϕ の過剰使用 (ϕ for *a/an* and *the*) が見られた。この点が Yamada & Matsuura (1982) の研究結果と Master (1995) の結果との間で一致しないと指摘されている (pp.196-197)。
- 2 特定性と情報が既知かどうかを混同する誤りは、普遍文法をフレームワークにした L2 習得研究でも報告されている (Ionin, 2003; Ionin, Wexler, & Ko, 2004 など)。
- 3 この観察は Yamada ら (1982) の観察と合致している。
- 4 Carroll 以外によっても言語適性の理論化が行われている。
- 5 本研究はタスクの様相がナラティブ中の冠詞使用に及ぼす影響を検討する研究と同時に行われた。福田・田中 (2009) を参照されたい。
- 6 この動画は University of California at Berkeley で製作された無声映画であり、ウェブ上でも視聴出来るものである。この動画中には、背景音、場面設定、登場人物、事物、出来事についての情報のみを含んでいる (Chafe, 1980)。
- 7 トークンを元にしたデータ分析結果については、福田・田中 (2009) を参照されたい。
- 8 この Huebner の分類方法を採用したのは、数々の先行研究で取り入れられていたためである (cf. Parish, 1987; Master, 1997; Thomas, 1989; and Butler, 2002 など)。
- 9 今回分析対象とはしない 9 つの名詞句のカテゴリーとは次のようなものである。言い換えと繰り返し (reformulations and repetitions)、固有名詞 (proper nouns)、イディオムなど (idioms and commonly used expressions)、代名詞 (pronominals)、二度目以降に言及された名詞句 (second and subsequent noun phrases in a series)、指示詞や所有格に続く名詞句 (noun phrase preceded by demonstratives and possessives)、不定数量詞 (indefinite quantifier)、不定数量詞の構成要素 (constituents in indefinite quantifiers)、その他 (unknown) である (福田・田中, 2009 参照)。
- 10 ライティングによるデータを選択した理由は、含まれる誤りがスリップではなく、エラーである可能性が、スピーキングデータ中よりも高いと考えたためである。
- 11 正用の冠詞の代わりにどのような冠詞が出現したのかについては本稿では扱わず、稿をあらためて論じることとする。
- 12 特に、*the* が不可算名詞の前に使用される場合には、英語能力の差によって正用・

誤用の差が現れやすいという報告がある（高橋・小橋，2008）。

参考文献

- Akamatsu, N., & Tanaka, T. (2008). The use of English articles: An analysis of the knowledge used by Japanese university students. *ARELE*, 19, 81-90.
- Audacity Portable. (2007). Audacity Portable (Version 1.2.6. Revision 2) [Computer software]. Retrived from http://portableapps.com/apps/music_video/audacity_portable
- Brown, R. (1973). *A first language: The early stages*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Butler, Y. G. (2002). Second language learners' theories on the use of English articles. *Studies in Second Language Acquisition*, 24, 451-480.
- Carroll, J. B., & Sapon, S. (1959). *Modern Language Aptitude Test: Form A*. New York: Psychological Testing.
- Chafe, W. (Ed.). (1980). *The pear stories: Cognitive, cultural, and linguistic aspects of narrative production*. New York: Ablex.
- Celce-Murcia, M., & Larsen-Freeman, D. (1983). *The grammar book: An ESL/EFL teacher's course*. Rowley, MA: Newbury House.
- Chaudron, C., & Parker, K. (1990). Discourse markedness and structural markedness: The acquisition of English noun phrase. *Studies in Second Language Acquisition*, 12, 43-64.
- DeKeyser, R. (2000). The robustness of critical period effects in second language acquisition, *Studies in Second Language Acquisition*, 22, 499-533.
- Dryer, M. (2009a, May 5). Definite articles. In M. Haspelmath, M. S. Dryer, D. Gil, & B. Comrie (Eds.), *The world atlas of language structures online* (chap. 37). Retrieved from <http://wals.info/feature/37.html>
- Dryer, M. (2009b, May 5). Indefinite articles. In M. Haspelmath, M. S. Dryer, D. Gil, & B. Comrie (Eds.), *The world atlas of language structures online* (chap. 38). Retrieved from <http://wals.info/feature/38.html>
- 福田真理・田中順子. (2009). タスクの性質と順序が L2英語アウトプットに与える影響——冠詞に焦点をおいて—— 国際文化学, 20, 15-33.
- Huebner, T. (1983). *A longitudinal analysis of the acquisition of English*. Ann Arbor, MI: Karoma Press.
- Huebner, T. (1985). System and variability in interlanguage syntax. *Language Learning*, 35, 141-163.
- Hunt, K. W. (1966). Recent measures in syntactic development. *Elementary English*, 43, 732-739.
- Ionin, T. (2003). *Article semantics in second language acquisition*. Doctoral dissertation. Cambridge, MA: Massachusetts Institute of Technology.

- Ionin, T., Ko, H., & Wexler, K. (2004). Article semantics in L2-acquisition: the role of specificity. *Language Acquisition*, 12, 3-69.
- Jarvis, S. (2002). Topic continuity in L2 English article use. *Studies in Second Language Acquisition*, 24, 387-418.
- Leech, G., Rayson, P., & Wilson, A. (2001). *Word frequencies in written and spoken English: Based on the British National Corpus*. London: Pearson Education.
- Maratos, M. P. (1976). *The use of definite and indefinite reference in young children: An experimental study of semantic acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Master, P. (1995). Consciousness raising and article pedagogy. In D. Belcher, & G. Braine (Eds.), *Exploring research and pedagogy on second language writing* (pp.183-204). Norwood, NJ: Ablex.
- Master, P. (1997). The English article system: Acquisition, function, and pedagogy. *System*, 25, 215-232.
- Parrish, B. (1987). A new look at methodologies in the study of article acquisition for learners of ESL. *Language Learning*, 37, 361-383.
- Skehan, P. *Individual differences in second-language learning*. London: Edward Arnold.
- Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In S. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp.235-253). Rowley, MA: Newbury House.
- 高橋俊明・小橋雅彦. (2008). 英語能力の差が英語の冠詞学習に及ぼす影響 第34回全国英語教育学会発表予稿集, 442-443.
- 田中順子. (2006). 日本語を L1 とする英語学習者による L2 英語冠詞使用について : Pear Story を用いた探索的研究 第32回 全国英語教育学会発表予稿集, 91-92.
- Thomas, M. (1989). The acquisition of English articles by first- and second-language learners. *Applied Psycholinguistics*, 10, 335-355.
- Yamada, J., & Matsuura, N. (1982). The use of the English article among Japanese students. *RELJ Journal*, 13, 50-63.
- Yoon, K. K. (1993). Challenging prototype descriptions: Perception of noun countability and indefinite vs. zero article use. *IRAL*, 31, 269-289.
- Young, R. (1986). Form-function relations in articles in English interlanguage. In R. Bayley & D. R. Preston (Eds.). *Second language acquisition and linguistic variation* (pp.135-175). Amsterdam: John Benjamins.